

一第87編 一馬の背の街道筋集落

茨城県つくば市の北西豊里の近傍に、洞下（ほらげ）という江戸時代に作られた集落がある。江戸に向かう馬の背の地形の上を走る街道筋に発達した細長い農村集落である。馬の背の地形の上に集落を作るには生活水の確保が必須であり、井戸堀の技術が一般化する江戸中期まで、稀な存在であった。

洞下は街道筋にできた集落であるから、背後の広大な農地を生業とする村人たちは、往来する旅人の宿を自分の住まいの一角に設けた。航空写真が示すように、区画は街道に対して直角方向に細長い短冊状を描き、畑地との境には十分に生育した平地林が街道の両側に並行して連なる。近傍の筑波山^{*}から吹きおろす「筑波おろし」から暮らしの環境を守る防風林である。近年、畑地のほとんどはゴルフ場に見えるのだが、供給するための芝畑となった。従って、この集落の独特な姿や景観が際立って見えるのだ。立派な構えの門から敷地に入ると手入れの行き届いた前庭が、そしてその奥に民家があ



写真87-1 洞下鳥瞰 (提供: 齋木崇人氏)

*1
筑波山(標高877
m)日本百名山のつ



写真87-2 洞下の農家

世代もこよなくこの集落を愛しており、子供ができれば子育てのためにここに戻ってきたという若い女性も多かった。旅人に慣れた彼らは、我々のような部外者にもならぬ用心することもなく暖かく迎い入れてくれて、お茶やみかんを戴きながらそんな話を伺った。

こうした集落が永く生き続けるには、そのような村人の思いと、民家を支える伝統木造構法の伝承された技術が必要である。集落を巡りながら、あちらこちらで修理や増築・改築が行われていたのを目撃したが、いずれも今の伝えられた伝統木構法によるものであったことにとっても安堵した記憶がある。

る。背後の平地林を背に、2000年近く暮らしを守り続けてきた。戦前まで2階で蚕を育て、そのために腰屋根が設けられた。今では2階は子供たちの部屋となり、現代の生活をゆるやかに受け入れて

いる。多くの村民に話を聞いたが、若い



写真87-3 街道に面した門から望む